

【報告】

創造性を育成するための看護教育方法の開発（その1）

—創造性看護教育に関する海外研修レポート—

佐藤 道子 石塚 淳子 岸 あゆみ
西本 桂子 三輪木君子 竹田千佐子

聖隷クリストファー大学看護学部

**Development of nursing education method for promoting
creativity (No 1)**

—A Report on creative nursing education in Korea—

Michiko SATO, Junko ISHIZUKA, Ayumi KISHI
Keiko NISHIMOTO, Kimiko MIWAKI, Chisako TAKEDA

Department of Nursing, Seirei Christopher University

抄 録

2006年9月、共同研究「創造性を育成するための看護教育方法の開発」の一環としての韓国研修の機会を得た。今回の研修の目的は、研究を進めるにあたって、研究対象の1つである韓国における研究計画の実現可能性の確認と具体的な打ち合わせを行うことであった。病院見学をはじめ、嶺南理工大学看護学科教員との交流セッション、嶺南大学の大学院生とのラベルワークの実施を通して、両国の看護教育に対する理解を深めるとともに、われわれの研究に対する理解と協力を得ることができた。さらに研究の具体的計画の実現可能性の確認できた。また、共同研究者である朴教授と綿密な打ち合わせもでき、研究を発展させるための方向性と課題を明確にすることができた。その成果を報告する。

キーワード：看護教育、創造性、ラベルワーク、共同研究、韓国研修

はじめに

ますます高まる人々の健康志向と価値観の多様化という社会情勢の変化の中、社会が看護に求めることは、多様なニーズに応えることのできる看護ではないだろうか。このような状況下において、現代の看護教育における最重要課題は、基本的な看護、マニュアル的な看護ではなく、その時、その場を得た独創的ともいえる看護の実践であり、そのための高い看護実践能力、とりわけ看護を創造する力の育成であろうと思われる。「看護は創造的活動である」といわれるように、看護においては「創造」は重要なキーワードである。近年この「創造」が学会などで取り上げられるようになってきている。しかし「創造」や「創造性」という言葉をどのように扱い、教育方法にまで具体化するかは試行錯誤の段階であり、看護教育者の課題であろう。今まさに求められている看護を創造する力、創造的問題解決能力を身につけた看護師育成のための具体的な教育方法の開発は急務と考える。そこで言葉としてだけではない「創造性」の教育はどうあればいいのか、国際比較を含めた現状の分析を手がかりにしてその教育方法の開発を目指して研究に取り組むこととした。今回は、その1段階として韓国研修を行なったので報告する。

I. 韓国研修に至った経緯

2003年10月日本創造学会研究大会参加の折り佐藤と石塚は、林義樹（現日本教育大学院大学教授）から同大会の国際セッションにおいて「創造性を喚起するエグゼクティブコーチング」のテーマで講演した朴在鎬（韓国 嶺南大学教授）を紹介された。

2003年12月佐藤は林教授と共に訪韓し、嶺南大学のFDに関する研修会で「学習者参画型の授業」について報告し、また参画理論のひとつの方法であるラベルワーク（佐藤 2004）を指導した。さらに嶺南理工大学看護学科の教員との交流集会で「日本の看護教育について」講演を行った。

2005年朴在鎬教授の日本（横浜国立大学）留学を機に、2006年2月25日（土）聖隷クリストファー大学に同教授を招聘し「グループダイナミクス理論とコーチング、SYMLOG（測定尺度）を用いたグループ診断法」に関する研修会を開催した。参加者は本学看護学部教員5名、同学生12名、浜松市立看護専門学校教員4名、同学生6名、横浜国立大学教員1名の計28名であった。この後朴教授との看護教育における創造性育成に関する共同研究を開始することとなった。

II. 韓国研修の目的

今回の研修の目的は、「創造性を育成するための看護教育方法の開発に関する研究」の準備段階として、研究対象の1つである韓国における研究計画の実現可能性の確認と具体的な打ち合わせを行うことであった。そのために以下の具体的な目的を持って臨んだ。

1. 日本と韓国の看護教育について情報交換をし、看護教育に対する理解を深める。
2. グループダイナミクス理論とコーチングについての理解を深めるとともに、SYMLOG（測定尺度）を用いたグループ診断法について学ぶ。
3. 研究の事前準備として、韓国の大学生を対象にしたラベルワークを用いたワークショップを実施する。

4. 韓国の看護教員や看護学生との交流を通して国際的な視野を広める。

Ⅲ. 研修方法

1. 嶺南大学病院を訪問し病院見学を行なった。
2. 嶺南理工大学看護学科において、創造性教育を中心テーマに交流セッションを行なった。
3. 嶺南大学において、大学院生と一緒に朴教授による SYMLOG with Positive Organization Change with Competency Model の講義を受けた。
4. 嶺南大学大学院生 30 名を対象にラベルワークを行なった。

Ⅳ. 研修内容

1. 嶺南大学病院見学

嶺南大学病院は、嶺南理工大学の前にあり、同大学看護学科学生の実習病院であった。1,000 ベッドを有する総合病院であり、大邱で 2 番目の規模の病院ということであった。建物は 3 棟からなる地下 1 階地上 14 階で天井は低く、廊下も狭く全体的に薄暗く歴史を感じるものであったが、看護師は全員上着がやさしく明るい模様のパンツスーツで、はつらつとした印象を受けた。看護部課長の案内で院内を見学したが、出会う人は必ず足を止めて挨拶を交わしていた。病棟で出会った看護学生は、3つの教育施設からの学生で、それぞれ異なる目的や目標で実習を行っており、実習指導を専任する看護師を配置し指導に当たっているということであった。また小児病棟の廊下には看護学生が作成したという作品が掲示されていた。学生の姿や看護部課長の説明から、看護学生が病棟の

中で自然な形で溶け込んで実習をしているという印象を受けた。ごく短時間の病院見学のため、病院の概要や看護部の理念など詳しく聞く機会が持てず残念だった。（図1・図2）



図1 実習中の学生(前列中央、後列左2人)

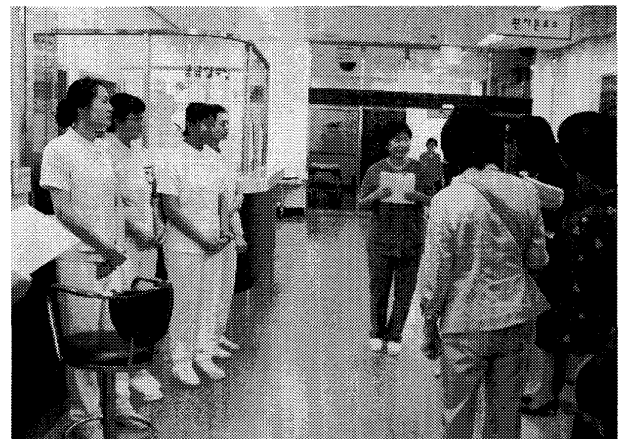


図2 NICUの説明を受ける

2. 嶺南理工大学看護学科における創造性教育に関する交流セッション

交流セッションの参加者は、嶺南理工大学看護学科の教授 12 名と我々 5 名のほか朴教授、同大学看護学生 2 名、嶺南大学大学院生 1 名の合計 21 名であった。嶺南理工大学教務企画処長の李鎬誠教授イ・ホソンの挨拶に続いて、聖隷クリストファー大学から西本が「大学紹介と学生の主体的な学習支援について」、佐藤が「創造性育成を目指

した看護教育」、石塚が「ラベルワークによる創造的学習方法の試み」についてプレゼンテーションした。韓国からは張銀姫教授による「嶺南理工大学看護学科の実習教育学習法」のプレゼンテーションがあった。その後短い時間であったが活発な討論が行なわれた。(図3・図4)



図3 張銀姫教授(左)と通訳の川原田先生(右)

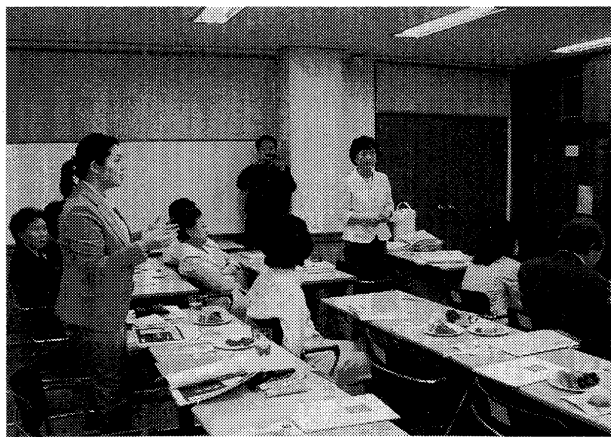


図4 質問に堂々と答える西本

<嶺南理工大学看護学科の概要>

嶺南理工大学看護学科は、1984年3月嶺南専門大学として開学し、1998年には嶺南理工大学看護学科に改名した3年制の大学である。1学年80名で、1クラス40名で構成されている。大学卒業生、大学2年以上修了者を対象と

した定員外特別専攻(10%)を設けている。1回生は92名が入学し、1983年1月に第1回卒業生82名を輩出した。2006年1月には第20回卒業生を出し、これまでに1800名の卒業生を輩出している歴史のある学科である。看護学科の特徴は、看護師国家試験合格率100%、就職率100%を誇り、1995年と2005年には全国最優秀看護学科賞を受賞している。また、2001年にNCLEX-RN(アメリカ看護師の免許を取るための課程)課程を開設し、2006年までに159名が参加、RN合格者18名、海外就職者13名を出している。(図5)



図5 嶺南理工大学看護学科特性化の概要性

<看護教育の実際>

看護教育の方法として、さまざまな教授・学習法を用いて行なっていることが、張銀姫教授から紹介された。

報告の中で、「SANKAKU approach」の方法として用いている「Label work」は佐藤が2003年訪韓時に紹介したものであり、その後さまざまな機会に活用していると報告された。そして、ラベルワークは学生が楽しくしかも集中力を持って行なえるグループワークの方法で、問題解決力や創意力の開発などに有効な学習方法と評価していた。また、「Reflective practice」では、実践能力の向上のために、学生が自分の技術練習の場面をビデオに録画し、授業で振り返りを行なうことが紹介された。これにより、学生の実践能力はもちろん、プレゼンテーション能力を高めること、場面の解釈能力や批判的能力も培う方法であることが説明された。

(図6)(表1)

表1 嶺南理工大学看護学科における多様な授業・学習法の具体的な内容

方法	運営	期待効果
プロジェクト学習	・チーム別に主題を選定 ・主題と関連した多様な資料を収集する ・チーム別に課題を完成する ・課題物の提出、及び発表	・深層的な探求能力の向上 ・グループワークを通じた協力を培う ・知識や情報などの統合能力を開発
SANKAKU approach	・主題の選定 ・学生の主体的参与 ・段階的 Label work ・総合的な結果を導き出す	・学習集中力の企図 ・問題化帰結能力の向上 ・創意力の開発
Team teaching	・学問的背景の優秀な選任教授と現場実務経験の豊富な臨床現場専門家とで構成されたチームによる理論、及び実習教育 ・領域別実習	・理論と実務が統合された効率的な学習 ・専攻別深化学習で研究能力を培う
OSCE 法を適用した学習	・多様な臨床の類似状況を設定 ・問題解決の過程を通じた評価	・看護の技術能力向上 ・臨床状況に対する判断力のフィードバック ・意思疎通の能力と態度を評価
Reflective practice	・具体的な実務状況の記述を通して状況を反映させる ・批判と解釈 ・対人関係の家庭を記録、またはビデオに録画して活用する	・実務状況に対する分析能力の向上 ・自己反省的な思考を増進させる ・正しい倫理観の確立 ・意思疎通能力の向上
体験学習	・シミュレーターを活用した体験 飲酒体験 妊娠婦体験 老人体験 障害者体験	・看護対象者に対する理解を深め、実際的な要求を把握できる学習の効果が得られる

3. ラベルワークを用いたワークショップ

嶺南大学においてラベルワークを行なった。最初に、三輪木が「ラベルワークの概要と方法」について説明し、ラベルワークの実施にあたっては石塚がそのつど説明し進行していった。

参加者；嶺南大学の大学院生 30 名
グループ編成；1グループ 4~5 名
ラベルのテーマ；「自己紹介をしよう」
ラベルの枚数；1人 2 枚
具体的方法；1 時間で図解を作成

30 分で発表会

参加学生は韓国人はもとより、中国、フランス、アメリカからの留学生もいて国際色豊かであった。本研修に同行されていた三和裕美子(明治大学教授、現ミシガン州立大学客員教授)の通訳により英語で進められた。ラベルワークは、終始和やかに話し合い、しかも集中して図解作成がされていた。その後の発表会も活発な意見交換がなされ、「普段の話し合いよりも楽しくできた」、「意見が言いやすかった」、「い

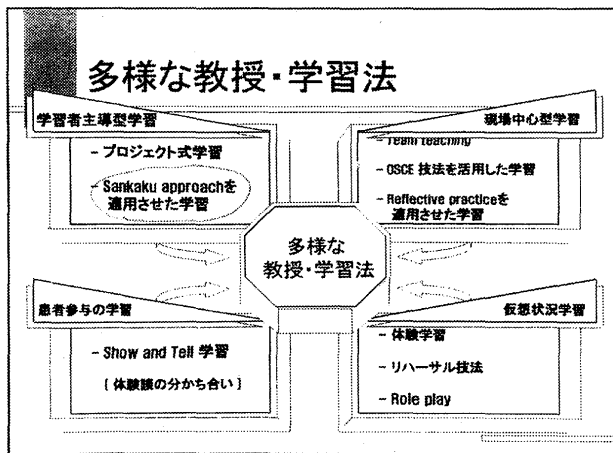


図6 嶺南理工大学看護学科における教授・学習法の概念図

ろいろな機会に使えるようだ」などラベルワークに対して肯定的な意見が聞かれた。また「自分はこれから軍隊に入るが、機会があったら使ってみたい」と韓国人ならではの発言もあった。(図7・図8・図9)



図7 ラベルワークの方法を説明する石塚



図8 ラベルワークをする嶺南大学の学生



図9 学生の質問に何かと答える佐藤

4. 講義；SYMLOG (System for Multiple Level of Observation of Groups)

朴教授のゼミ生25人とともに講義を受けた。英語による説明であったが、朴教授は私たちのために、日本語を交えて講義をしてくださった。ゼミ生は熱心に、しかしリラックスした雰囲気の中で講義を受けていた。

1) SYMLOGとは

相互作用研究としてHarvard大学のRobert F Balesがはじめたものである。目的は、集団を通して個人が成長するための自己分析理論のプログラムである。Robert F Balesは個人診断(性格検査)、グループ診断、集団開発の研究を行なった。SYMLOG(測定尺度)は集団における個人やチームの力動を3つの次元から診断する(360度評定フィードバック)ことができる。

- ①U-D次元；上下方向を意味する次元(U=Up上、D=Down下)。上方向次元は活動力・統括力・影響力を表す。下方向次元は受動性・内向性・静寂性を表す。
- ②F-B次元；前後方向を意味する次元(F=Forward前、B=Backward後ろ)。前方向次元はタスク志向・問題解決、分析を表す。後ろ方向次元は感覚・感情・非タスク志向を表す。
- ③P-N次元；積極的、消極的方向を意味する次元(P=Positive積極的、N=Negative消極的)。積極的次元はグループ中心主義・友好的・人間関係志向型を表す。消極的次元は非友好的・個人中心主義・否定主義を表す。

V. 研修の成果

今回の韓国における研修では、多くの学びを得、また研修の目的を達成することができた。

1. 共同研究の進展に向けて

嶺南理工大学看護学科の教員との交流セッションを通して、韓国の看護教育に対する理解を深めることができた。特に、教育方針として、学生の主体性や創造性を育成する事、看護技術力を高める事を重視して教育が企画され、様々な教育方法を用いて実践されていることを知ることができた。そしてお互いに看護教育に対する考え方の共通認識ができたことの意義は大きい。さらに我々が計画している創造性看護教育の教育方法の開発についての考え方、協力の要請にも理解を示してもらえた。何よりも、ラベルワークを実践していること、その効果を我々と同じように捉えられていることの意味は大きいものであった。

我々の研究計画のひとつであるラベルワークの有効性検証については、今回嶺南大学で行ったラベルワークの手ごたえから韓国においてその実現可能性を確認することができた。共同研究者である朴教授と今後の研究の進め方の打ち合わせも行うことができ、研究を発展させるための大きな前進となった。

2. 韓国における看護教育の実態からの学び

嶺南理工大学看護学科は3年制の大学であったが、韓国の看護教育制度は4年制と3年制の大学があり、いずれも高校卒業者が各大学の入学試験を受けて入学する。2000年における看護師養成は、4年制大学50校、3年制大学61校、卒業者数は10,385人である。医療施設勤務者は修士30%、博士10%と高等教育を受け

た看護師も多い。したがって、看護師は臨床や地域でプライドを持って活動しているという（高井2005）。私たちが接した嶺南理工大学看護学科の教員や嶺南大学病院の看護師からも、自信と誇りを持って自分の仕事に携わっているという印象を強く受けた。

また、韓国は戦後、アメリカの医療制度や看護教育体制を取り入れ、日本より早く4年制看護大学や修士課程、博士課程を設置した。また、積極的にアメリカに教育研究者を派遣するなど先駆的な教育体制を導入している（高井2005）。こうしたことが嶺南理工大学看護学科の米国看護師免許取得のための教育課程設置や、さまざまな教育方法を用いた授業実践に反映されている。距離的には日本と最も近い国である韓国の看護教育事情について改めて知り、韓国から学ぶことは大きいと感じた。

また、儒教の国であるためか、教育の徹底だろうか、病院見学時に会った看護実習生や大学内で接した学生の礼儀正しさに感心した。たとえば、私たちとすれ違うとき一瞬足を止めて挨拶をする、会議室やトイレの場所を尋ねると、「こちらです」とその場所まで案内してくれるといった行動を自然に誰でも取っていた。日本においては、看護対象者のニーズが高まる中、看護活動の場が地域へと広がっている今、こうした態度形成は必要でありその育成方法は課題でもある。今回は学生の姿を垣間見た程度であったが、授業の様子を見学したり、直接学生話話をしたりして、もう少し詳しく知りたいと感じた。

おわりに

われわれにとっては、海外を対象とする研究は初めての体験であり、準備の段階から戸惑う

ことも多いものであった。朴教授からは何度も考え方やその説明を求められた。自分たちの意図が相手に伝わる資料を作成すること、理解の得られる説明のしかた、そのための綿密な準備が必要であることなどさまざまなことを学び、今後研究を進めていく上での課題となった。

今回の研修は、朴教授の絶大なる支援により実現したものであった。また多くの方々の協力の下に充実した研修となった。特に嶺南理工大学看護学科では、嶺南理工大学建築科の専任講師の川原田典子先生に資料の翻訳と通訳をしていただいた。嶺南理工大学看護学科の教員の尽力により資料は冊子として用意されて当日配布された。また現在ミシガン州立大学で客員教授をされている三和裕美子先生には、事前に私たちの資料の英訳をしていただき、アメリカから韓国に来て私たちに同行し通訳をしていただいた。これらは全て朴教授のマネジメントによるものであった。朴教授は「私たちを迎えるためだけに多くの時間を使った」ということであったが、物事を成功裡に収め、より高いレベルの達成を得るためには最大限の努力を惜しまないことを朴教授から学んだ。この学びを教育に携わる者として、また研究に臨む態度として生かしていきたいと思う。(図10)



図10 佛國寺にて 朴教授と研究の成功祈願

引用・参考文献

- 1) 高井純子,曾根志穂,大木秀一,斉藤恵美子,田村須賀子,佐伯和子(2005): 韓国における地域で働く看護職の現状及び教育体制について, *Ishikawa Journal of Nursing* Vol.3(1), 2005
- 2) 間朋子: 自律性をもった看護職をめざした大学教育, <http://iota-nhs.ac.jp/Kusama-Op2.html> 3)
- 3) 佐藤道子 (2004): 第3章ラベルワークの方法, 林義樹, 看護の知を紡ぐラベルワーク技法 pp53-79, 精神看護出版